

おかげ参りと八木の町

講師：谷山正道（天理大学文学部教授）

日時：平成16年7月30日

会場：八木地区公民館



ただ今ご紹介いただきました谷山です。天理大学のほうで、近世の文書の勉強をしております。今回は、「おかげ参り（伊勢参り）と八木」ということで、お話しさせていただきます。実は、八木の恵比須神社でおかげ参りと接待場に関する貴重な資料がでてきました。これは、橿原市立図書館で整理をされると思いますが、私もそれを見させていただきました。この史料についても今回の話の中でしていきたいと思います。

1 交通の要衝 八木

八木は、中街道（下ツ道）と伊勢街道（初瀬街道・横大路）の交差点であり交通の要衝でした。西国名所図会には、「八木の町の札の辻は、東は桜井より泊瀬にいたる街道。南は岡寺、高取、吉野等への通ず、西は高田より竹内、当麻への往還、北は田原本より奈良、郡山への通路にして、四方往還の十字街なれば、晴雨暑寒をいとわず。平生に旅人間断なく、至って賑わし。毎朝札場の傍において魚市あり。此辺いづれも旅籠屋にて、家作ひろく、端麗なれば、伊勢参宮の陽気連、駕をつれたる大和巡り、両掛もたせし西国巡礼など、日の高きを言ずして、ここに宿る。所謂近隣においての繁花なり。」とあり、大和における主要道路の交差点であり、魚市がたち、端麗な旅籠屋がならんでいました。

札の辻から北に向かう中街道は道幅が広がっており、道の中央に溝があり、中世以来市場が設けられました。魚市は近代に入っても堺や岸和田方面から毎日魚市売が行われていました。油座のほか、糖売座、駄賃座、鳥餅座など南大和や吉野方面からの特産をたずさえた商人が集まってきたようです。

北八木町・南八木町の史料からは、旅籠の状況などから、宿場町・市場町としてのにぎわいが伝わってきます。

2 近世の文書に見えるおかげ参りの様子

おかげ参りとは、江戸時代に数次にわたりみられた伊勢神宮への民衆の大量群参のことです。1650年（慶安3年）、1705年（宝永2年）、1771年（明和8年）、1830年（天保元年）の4回が著名であるが、そのほかにも、1638年（寛永15年）、1661年（寛文元年）、1718年（享保3年）1723年、1730年、1740年（元文5年）などが知られています。

1650年（慶安）には、3月中旬から5月まで、箱根の関所を通過して伊勢へ向かう民衆は1日2,500人から2,600人に及んだといわれています。この年は関東が中心で「おかげまいり」とは言わず「抜参り」とよばれていました。

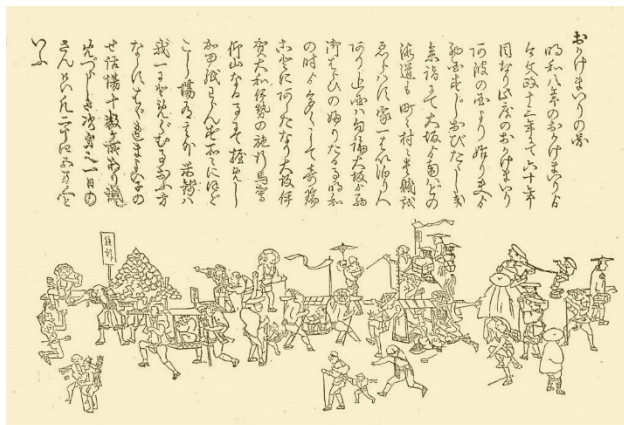
1705年（宝永）には、4月9日から5月29日までに参宮した人は362万人とあります。宝永の時は、子どもの参加者が多く、また、地域は関東、中部、畿内と広くなり、参宮者への食物その他の施行もみられました。

1771年（明和）には、宮川の渡を4月8日から8月9日までに渡った人数は207万7450人とされます。この頃には、神符の降下などの神意や施行により神のお陰で参宮ができるという意

識が広まり、「お陰参り」の語が一般化しました。頭に笠、手に柄杓というお陰参りの装束で、職業ごとに集団をなし、笠に印をつけたり、幟をもつようになり、民衆の範囲も広くなりました。

1830年(文政・天保)のお陰参りはかねてから民衆に期待されていましたが、3月に阿波からおこったとされます。河内・大和などの畿内一円では、村ごとに衣装をととのえ踊る「おかげ踊り」が流行しました。

3 八木における施行(せぎょう)の実態



おかげ参りの様子を描いた木版画(江戸時代)

さて、このようにお陰参りは約60年の周期で流行しましたが、曾我村「堀内氏記録○外覚書」や山之坊村「吉川家の記録」、上品寺村「上田家の記録」などに、宝永、明和の八木周辺の状況が記録されています。

宝永については、曾我村の「堀内氏記録○外覚え書」に、「・・・伊勢参宮日本国より大ぬけ参り有之、此時ハ出銭一銭も無之、人と我ニ何時共なくおもいおもいにぬけ参り致し候、・・・」とあり、ぬけ参りが記録されています。

明和に関して、曾我村の堀内氏記録では、4月28・29日より、京都大坂よりおびたしい状況で、女、子どもの姿もあったようです。街道筋に、

接待場ができ、村々から米・麦・柴・薪等を持参したことが記録されています。山之坊の吉川家の記録では、4月20日ころから山城あたりよりお影参りがあり、山之坊の村にも御祓がふったこと。方々に茶接待場が出来、八木・今井は格別であったことなどが記載されています。上品寺村の上田家の記録にも八木西口に接待場があったことがわかります。

文政・天保に関しては、上品寺村の上田家の記録に、「文政13〇年3月伊勢神宮おかげ抜け参りの次第、当年おかげ参りの儀ハ〇3月29日より阿波国より起り候由、・・・閏3月朔日ハ八木西口ニ而大神宮ニ施行いたし、むしろ二而のぼり立、・・・」とあります。北八木町の恵比寿神社には、文政13年八木町施行場の図が2葉あり、本日、この会場にもってきていただいていますので、後にご覧いただければと思います。

恵比寿神社ではその他に、明和8年、文政13年の伊勢参宮関係資料やお陰施行帳等が発見されました。八木西口の施行場以外に南八木(南井之辻)にも施行があったこと。芸子や町娘が三味線たいこをもって、おどり大騒ぎしたこと。また、接待寄進物とその寄進者名があり、色々面白いことがわかります。

明和では、麦、割木、茶、金、扇子、わらじなどが寄進され、寄進者は近在の村々や大坂の商人(これは、八木の商人の関係者か?)などでした。文政では、麦のほかに米やもち、割木、茶、わらじは明和と同じですが、酒、銭が多くでてきています。

「八木とり源」の宿泊者がわかる「文政13年寅4月5日初 施行者人別控」には、その時の宿泊者のグループ数や出身地がわかります。4月初め頃は和泉、河内の出身が多く、中旬以降は紀伊が多くなります。遠く江戸や奥州津軽、越後、筑後な

ども見られます。ひとつのグループ数は2～3人から多くて6～7人のグループです。1日に100人以上もの宿泊者がある日もありました。また、施行所間で迷子の吟味や宿泊者の斡旋等がされていたこともわかります。

おわりに

このように、八木はお陰参りの接待場を設けて、施行をしていました。また、宿泊者名簿から一日100人以上の者が1軒の旅籠に泊まっており、多くの参拝者があったことがわかりました。現在、八木西口の接待場は、民地となっていますが、灯籠等に その当時の面影をしのぶことができます。私はその接待場は文化財的な価値があり、何らかの形で整備できればと思っています。